

# 積層する源流

水の惑星、地球はあまりに住み心地が良かった。  
人間はその奇跡を軽んじ、傲慢に生きた。  
地球と別れることを余儀なくされ、他なる星を探しながら、  
それでも自らの身体に染みわたる源流、水を求めた。  
愚かで愚直な人間の移住計画である。

候補地に、氷で覆われた星、エウロパが挙がる。  
しかし、極寒、高い放射線量など課題は多い。  
そこには、厳しい環境から移住基地を  
守るシェルターが必要とされた。

本提案は、エウロパをまわる静止衛星が空気膜構造を型枠としながら氷の積層構造をつくり、シェルターとして基地を覆う、というもの。

人間が生物として欲する水を、いま、建材として利用するのだ。  
愚直だ。人間の人間たる美しさかもしれない。  
水はこれまでの人間の源流であると同時に  
人間の第二章の源流としてもその姿を現すのだ。

エウロパは木星の衛星、氷に表面を覆われている  
極寒であることや放射線量が高いこと、地表の凹凸が激しいことが  
移住先としての欠点とされている。

エウロパ上空で、第一宇宙速度で二基の衛星が飛行する。  
シェルター内部と外部から二機で作り上げていく。  
ほぼ無重力状態においてシェルターは大きな卵のような形に形成される。

畳んで運搬した、ガラス繊維を含む  
構久膜でできた風船を展開する。

地球から運搬した水を送り込む。

内側からもう一枚、  
一回り小さい風船を膨らませる。  
膜に取り付けた磁力を持つ装置で  
風船の軸をそろえながら膨らませる。

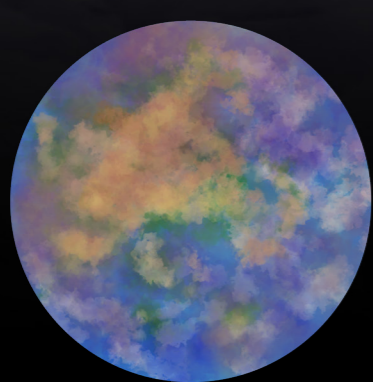
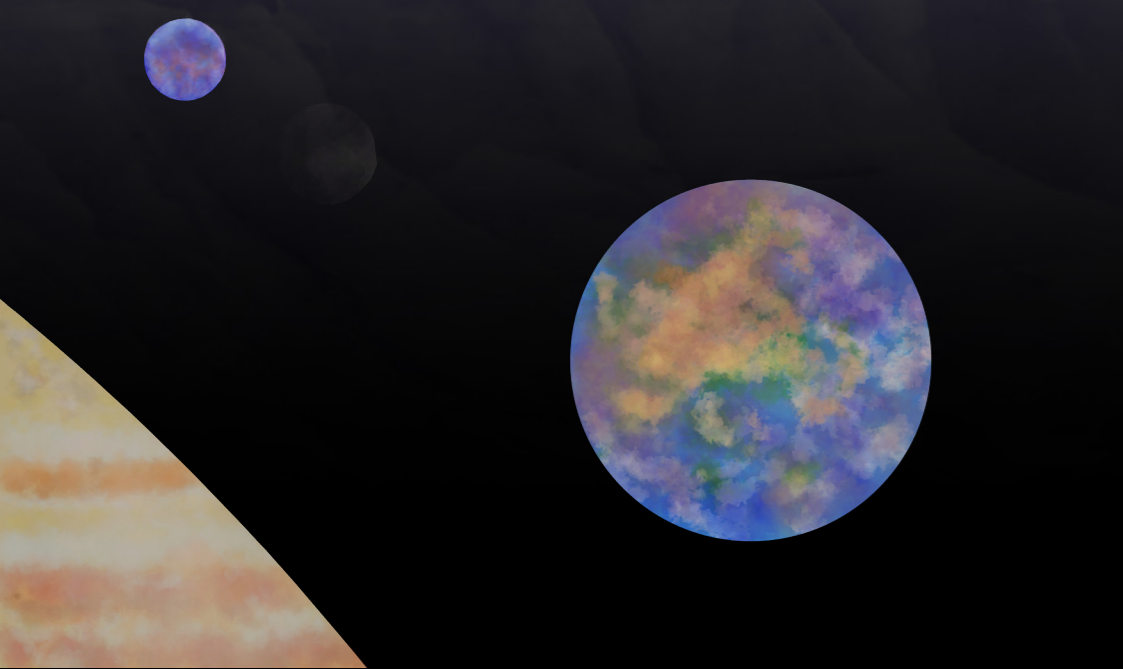
次の層には、  
エウロパの大気である酸素を送り込む

これらを6度繰り返す。  
エウロパ周辺の気温は-150℃を大きく下回るため、  
氷の層と空気層ができる。

あらかじめ断面が放物線になるよう膜を設計しており、  
無重力空間により精密にその対称性を保って膨張する。  
中の衛星がこのシェルターを切断しながら出てきて完成する。

各空気層の温度を調節することで、  
断熱性を生み、極寒から研究者を守る。

氷層の水分子が放射線の侵入を防ぐ。



一般人の移住の前に研究者の移住と探査が行われる。  
地表の凹凸を避けるように大小いくつかの基地が展開される。

